

目次

関西学院のエスプリ

I



池田裕子



Kwansei Gakuin Archives

関西学院 学院史編纂室

1. アメリカ合衆国大統領と関西学院
2. ベーツ先生の原点
3. 120年前のランバス一家
4. ロシア人捕虜の子セネカ
5. クリスマスツリーの飾りつけ
6. 墓地で見つけた十字架
7. 生みの親より育ての親
8. 関西学院とカナダ
9. 夏休み前の午餐会
10. "Launch out into the deep." (ルカ伝5章4節)
11. 30年来の旧友 - ベーツとマシューズ -
12. アイゼンブルグ少年のレプタ
13. 父と娘
14. 忘れられた墓標
15. 天皇機関説事件と中島重教授



1. アメリカ合衆国大統領と関西学院

アメリカ合衆国第 44 代大統領にバラク・オバマ氏が就任しました。この機会に、アメリカの南メソヂスト監督教会により創立された関西学院と縁のあった歴代大統領を思いつくまま挙げてみましょう。

最初に思い出されるのは、第 16 代エイブラハム・リンカーン(1861-65)です。南軍兵士として南北戦争で戦った J. C. C. ニュートン 第 3 代院長は、リンカーンの肖像画の付いた新聞を部屋に飾っていました。また、ニュートンがジョンズ・ホプキンス大学大学院で H. B. アダムズ教授の指導を受けていた時、後に第 28 代大統領となったウッドロウ・ウィルソン(1913-21)が同教授のもとで博士号を取得しました。学院史編纂室には、同大統領の小さな胸像が残されています。なお、ニュートンの名ジョン・コールドウェル・カルフーン(J. C. C.)は、第 6 代ジョン・クインシー・アダムズ(1825-29)、第 7 代アンドリュー・ジャクソン(1829-37)両大統領時代の副大統領の名に因んで付けられたものです。

それから、第 22 代、24 代大統領を務めたグローバー・クリーブランド(1885-89, 93-97)は、創立者 W. R. ランバスの母方の親戚に当たりません。第 26 代セオドア・ルーズベルト(1901-09)時代の副大統領チャールズ・フェアバンクスが 1909 年に来神した際、吉岡美国第 2 代院長の話す洗練された英語に驚嘆したという逸話が残っています。

近いところでは、第 39 代大統領ジミー・カーター氏(1977-81)を千刈セミナーハウス(2005 年 10 月より休館中)にお迎えし、聖日礼拝を守ったことをご記憶の方もいらっしゃるでしょう。それは、大統領辞任直後の 1981 年 9 月のことでした。カーター氏には名誉博士号が授与されました。



千刈セミナーハウスでカーター前大統領を迎える
久山康理事長・院長
—1981 年 9 月 6 日—

【2009 年 4 月】



2. ベーツ先生の原点

関西学院は、1889年にアメリカの南メソヂスト監督教会によって創立された小さな学校でした。発展のきっかけは、1910年のカナダ・メソヂスト教会の経営参加です。しかし、これは同時に、南メソヂスト派、カナダ・メソヂスト派という対立関係を常に抱え込むことでもありました。この勢力争いや確執をバランスよく治めることに能力を発揮したのが、第4代院長を務めたカナダ人宣教師 C. J. L. ベーツです。ベーツの見事な調整能力は、少年時代を過ごした故郷ロリニャルで培われたようです。

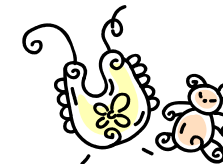
ロリニャルは、カナダの首都オタワとモントリオールのちょうど真ん中に位置する人口千人程の小さな村で、住民の3/4はフランス語を話しました。当時、この地域はフランス語人口が増加しつつあったのです。村には、大きなカトリック教会と3つの小さなプロテスタント教会がありました。少年時代のベーツは、日曜の朝は長老派、午後は英国国教会、夕方はメソヂスト教会に通っていました。この3つの異なる教会での祈り、礼拝、賛美の経験が、自分のライフワークの原点だったと晩年のベーツは振り返っています。

村人たちは、自分の文化と言葉と教会こそが一番だと信じていました。と同時に、寛容な精神と善意と互いを敬う気持ちにより、様々な問題を友好的に解決する術を身につけていました。ですから、ベーツたちが小さなメソヂスト教会を建てた時、カトリックの神父からさえも援助を受けることができたのです。教会の女性が献金を求めに行くと、ベルベ神父は優しく笑いながらこう言って4ドルを差し出しました。「プロテスタントの教会を建てるのに差し上げられるものは何もないけれど、敷地内の古い建物を取り壊せば何かお渡しできるでしょう」。



「祖父の面影があるでしょう？」と
モントリオールでチャールズ・デメストラルさんが
お見せくださったベーツ先生の原点とも言える写真
—1878年頃—

【2009年6月】



3. 120 年前のランバス一家

関西学院がウォルター・ランバスにより創立されたのは、今から 120 年前の 1889 年のことでした。その頃、神戸には、ウォルターとその妻 デイジーに子ども 2 人、妹ノラ、弟ロバートとその妻アリス、さらに両親ウィリアムとメアリーの総勢 9 人の家族が揃っていました。

兄の親友である医師と結婚し、中国で伝道活動に従事していたノラ・パークは、妊娠中、両親のもとに帰っていました。ロバートは、新妻アリスを伴って来日し、徳島や神戸で英語を教えていました。1889 年、この 3 組の夫婦に赤ん坊が誕生したのです。ノラとロバートは女の子、ウォルターは男の子を授かりました。山 2 番館はどんなに賑やかだったことでしょう。さらに、ロバートも学校 (Kobe Institute) を創立しました。

翌年、幸せな家族に黒い影が忍び寄ります (1890 年は神戸でコレラが大流行した年でした)。妻の体調悪化のため、まずロバート一家が、次にウォルター一家が離日しました。アトランタに落ち着いたロバートは家を用意し、両親の帰国を待ちます。ところが、父ウィリアムが病に倒れ、神戸で天に召されてしまうのです。さらに、妻アリスも死の床につきます。アリスは、幼いネティの養育を姑メアリーに託しました。早くに両親を亡くしたアリスにとって、神戸で夫の家族に囲まれて過ごした多忙な日々は、人生で最も幸せなひと時だったのかも知れません。

このような事情から、120 年前に神戸で生を受けたランバス家の 3 人の子どもの内、ただ 1 人が神戸で育てられることになりました。メアリーは、アリスの遺児ネティを連れて神戸に戻り、未っ子ロバートが創立した学校を支えたのでした。



神戸のランバス一家—1889 年または 1890 年—
ジーン・ルイスさん (ロバート・ランバスご令孫) 所蔵

後列左より：ノラ、パーク、デイジー、ウォルター、ロバート、アリス
中 央：ジェームズ・ウィリアム、メアリー・イザベラ

【2009年8月】



4. ロシア人捕虜の子セネカ

この秋から放映されるNHKスペシャルドラマ「坂の上の雲」（原作：司馬遼太郎）の舞台松山は、関西学院を創立したアメリカ南メソヂスト監督教会の伝道地です。そこに捕虜（俘虜）収容所が開設されたのは、日露開戦からわずか一月後のことでした。捕虜への対応が行き届いていないため、「マツヤマ」と叫びながら日本軍に降伏してくるロシア兵が後を絶たなかったと言われています。人口3万の街に延べ6千人以上のロシア兵が送られました。捕虜の中には子ども連れもいたようで、「浜寺に3人、静岡、姫路、松山に1人の小児あり」との記録が残されています。

当時松山にいた宣教師は、数年前まで関西学院で教えていたT. W. B. デマリーでした。デマリー家は、捕虜の子セネカ・ロモフ（8歳）を預かることになりました。セネカの父は、旅順で捕らえられた陸軍大尉でした。母親は既に亡くなっていたと思われます。言葉は通じなくても、子ども同士の遊びには何の支障もありませんでした。デマリー家の子どもたちは「戦争ごっこ」で撃たれた時のセネカの姿から、彼が実戦の場にいたことを知りました。

別れは突然やってきました。父親が迎えに来た時、セネカはパントリーに隠れました。デマリー家の子どもたちが見つけ出し、連れて来ました。父親が何か命ずると、セネカはデマリー夫人に駆け寄り抱きつきました。デマリー家の人々は涙を抑えることができませんでした。ところが、父の口から次の命が発せられるやいなや、幼いセネカはその後に従い、堂々と行進して行ったのです。その後の父子の消息は、まだわかっていません。



T. W. B. デマリー一家—1908年頃—

デマリー夫妻と4人の息子（左より、ユージン、ケネス、ラルフ、ポール）

写真情報をご提供くださったラルフ・バーロウ師に感謝します。

【2009年10月】



5. クリスマスツリーの飾りつけ

クリスマスが近づくと、関西学院西宮上ヶ原キャンパスでは時計台前のヒマラヤ杉がイルミネーションで飾られ、時計台自体もライトアップされます。この習慣は学内だけでなく市民にもすっかり浸透し、関西学院の冬の風物詩として親しまれています。

クリスマスツリー点火にあわせて礼拝が行われるようになったのは、震災直前のことでした。1994年11月28日、日が落ちてすっかり暗くなった午後6時、ハンドベルの演奏と聖歌隊による讃美歌が流れ、学生や市民約700人がキャンドルを手に中央芝生に集まりました。

では、この電飾はいつから始まったのでしょうか？ 神学部教授を務めたアメリカ人宣教師 W. D. プレイが1980年10月27日の最終講義でこう語っています。「紛争の時に図書館（時計台）前の大木が学生によって切り倒されましたね。その6年前から、クリスマスの時にその大木に赤や黄色の電球でデコレーションしていました。あれは私のアイデアです。ちょうど2万円かかったはず」。

さらに、世界に目を向けた時、ツリーへの飾りつけが最初に施されたのはいつ、どこの街だったのでしょうか？ これには諸説あるようですが、私はラトビア共和国の首都リーガ説に肩入れしたいと思います（リーガ市対外交渉局発行の冊子によると、キリスト生誕を記念して、1510年にリーガの商人らが初めてもみの木を花で飾ったそうです）。と言うのは、今から90年前の関西学院にはラトビア人教師イアン・オゾリンがいて、建国間もないラトビア領事の役割をも果たしていたからです。



リーガ市庁舎広場のクリスマスツリー
 (撮影：Leons Balodis、写真提供：駐日ラトビア共和国大使館)

「クリスマスツリーをどこでご覧になろうとも、
 この習慣がはじまったのはリーガであることをお忘れなく」
 (リーガ市対外交渉局発行の冊子より)

【2009年12月】



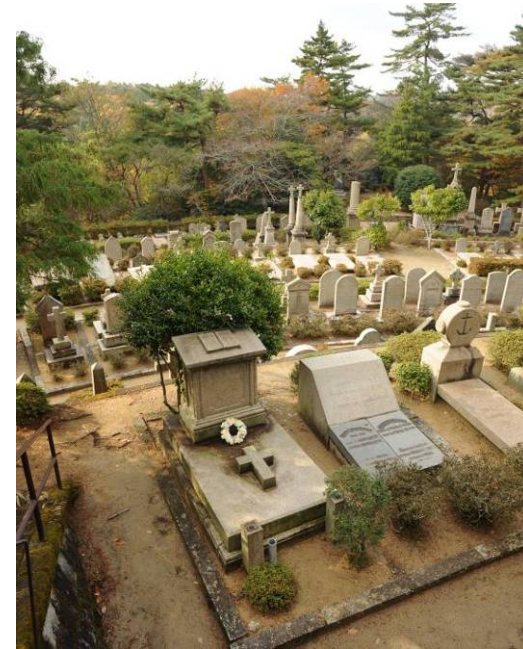
6. 墓地で見つけた十字架

今から4年前の事です。修法ヶ原に眠るJ. W. ランバス(関西学院創立者の父、M. I. ランバスの夫)のお墓を訪れた時、墓石の上に小さな銀色の十字架が置かれていることに気がきました。それは、2004年夏、ランバス家の故郷ミシシッピ州を仕事で訪問した時、J. W. ランバスの弟(故郷で巡回牧師となって献金を集め、兄の中国伝道を支えました)の子孫ジョン・ルイスさんからいただいたのと同じものでした。十字架をくださった時、ジョンさんは私にこうおっしゃいました。「小さいからどこでも持ち歩けるし、誰にも気付かれないよ」。腹が立った時、悲しい時、ジョンさんはポケットにそっと手を入れ、十字架を触るのだそうです。

その十字架が何故ここに? 来日されたジョンさんは、お墓参りの時、いつも持ち歩いている十字架を埋めてきたと言っておられました。それが、1年以上経った今、目の前にあるのです。まるで、私が来るのを待っていたかのように。

墓地をご案内くださった谷口良平さんに驚きを告げると、「十字架を置いたのは私です」とおっしゃいました。墓碑銘調査のため毎週末墓地に通っておられた谷口さんは、ある日、ランバスの墓石のそばに小さな十字架が落ちていることに気付かれたそうです。以来、十字架を見つけるとは墓石の上に置き直すことを続けて来られたのです。

この話を聞いた神戸市立外国人墓地事務所の方は、十字架を埋め戻してくださいました。そして、「相当深く掘ったから、雨が降っても風が吹いても、もう大丈夫ですよ」と私にお電話くださいました。



J. W. ランバス(1830-92)の墓—2009年11月25日—
(撮影：清水茂)

当初埋葬された小野浜墓地は、小野浜、春日野両墓地の移転統合(1952年と61年)により、神戸市立外国人墓地となりました。

【2010年2月】



7. 生みの親より育ての親

初代神学部長を務めた J. C. C. ニュートンは、創立者 W. R. ランバースが 1890 年末に関西学院を去った後も学校に残り、創立者の精神を伝え、学校の基礎を築き、第 3 代院長に就任しました。その教えを受けた学生は「生みの親より育ての親」という諺でニュートンを称えました。学生に「ジェントルマン」と声をかけた C. J. L. ベーツ第 4 代院長に対し、ニュートン院長は、温かく「ブラザー」と呼びかけていました。そんなニュートンにまつわるエピソードを紹介しましょう。

元町から関西学院のある上筒井に向かう市電の中でのことです。ある学生が高齢の女性に席を譲りました。すると、偶然同じ電車に乗り合わせていたニュートンが女性の前に進み出て、たどたどしい日本語で説明を始めたのです。「この学生は関西学院の学生です」。恥ずかしさのあまり、その場を立ち去ろうとする学生の手をニュートンはぎゅっと握り締めました。恩師の柔らかな手の温もりは学生の胸に深く刻まれました。

代返ばかりで実際の出席者が 1/3 しかいなくても、「オール・プレゼント」と言って喜んだニュートン。”God”と答案にたくさん書いたら点が高くなるという伝説を残したニュートン。どんなに悪戯しても、ますます親切にしてくれたニュートン。チャペルをサボっても叱ることのなかったニュートン。高齢の院長に対する不満を直訴に来た学生会の役員に対し、「適任者が確定するまで、どうか学生会が一致してこの私を助けてください」と言って共に祈ったニュートン。自分と他人の傘の区別がつかなかったニュートン。ニュートンの前では、悪戯盛りの普通学部生ですら、自らの行為を反省し、神妙にならざるを得ませんでした。



神学部卒業生と教師—1912 年—
(左より T. H. ヘーデン、吉岡美国、J. C. C. ニュートン)

ニュートン愛用のシルクハットは、
2002 年に玄孫のアマンダ・シールズさんから
学院史編纂室に寄贈されました。

【2010年4月】



8. 関西学院とカナダ

アメリカの南メソヂスト監督教会が 1889 年に創立した関西学院の経営に、カナダのメソヂスト教会が加わったのは今からちょうど 100 年前の 1910 年でした。日本のオタワへの公使館設置が 1928 年、カナダの東京への設置が翌 29 年であることを考えると、関西学院とカナダの間には、国同士の外交関係以上に長い歴史があると言えるでしょう。

初代駐日公使ハーバート・マーラーは、9 月の赴任後、早くも 11 月末には関西学院を訪れています。『関西学院新聞』によると、C. J. L. ベーツ院長の紹介により、中央講堂で「国際的大講演会」が行われました。実は、戦後の話になりますが、ベーツ自身もカナダ政府から駐日大使の打診を受けていたことを、教え子であり、初代高等部長を務めた河辺満麿が明かしています。河辺によれば、ベーツの態度の特徴は「寛大、人格尊重、調和、協力」だったそうです。

両国間には不幸な時代もありました。カナダのドイツへの宣戦布告は 1939 年 9 月 10 日でしたが、参戦を決めた下院議会において、唯一人立ち上がり、いかなる戦争も悪であるとの信念を感動的な言葉で訴えた議員がいました。関西学院文学部長を務めた H. F. ウッズウォースの兄です。

また、長らく関西学院の理事を務めたダニエル・ノルマンの長男ハワード、次男ハーバート兄弟の存在も忘れることはできません。兄は宣教師となって関西学院大学神学部で教えました。外交官になった弟は共産主義者との疑いをかけられ、1957 年にエジプトのカイロで痛ましい最期を遂げました。その時、関西学院には新聞記者が詰めかけたと伝えられています。

1961 年には、国賓として来日中のディーフェンベーカー首相が関西学院を訪問しました。



時計台エントランスに

ハーバート・マーラー初代駐日カナダ公使（帽子の男性）を迎えて
—1929 年 11 月 26 日または 27 日—

ステッキ姿は C. J. L. ベーツ院長、右端に H. F. ウッズウォース文学部長
アルマン・デメストラルさん（ベーツ院長ご令孫）所蔵

【2010年6月】



9. 夏休み前の午餐会

関西学院が1912年に開設した高等学部（文科・商科）の船出は困難を極めました。両科併せて100名の新入生を募集したのに、集まった志願者はたったの50名。結局、口頭試問のみを実施し、39名（文科3名・商科36名）の入学を許可しました。専用の校舎もなく、教授陣も図書も不十分な中、初代高等学部長C. J. L. ベーツは”Be patient.”と学生に諭し、”Be ambitious.” ”You must have a vision.”と学生を励ました。そして「私は天から示されたことに背かず」（使徒言行録26章19節）、「幻がなければ民は墮落する」（箴言29章18節）などの言葉を引用し、リーダーシップを発揮しました。

しかし、最初の夏休みを迎える頃には学生たちの不平不満は高まり、こんな状況ではとても勉強できないと、試験の延期を迫りました。進路変更を真剣に考える者も出てきました。そんな中、午餐会の招待状がベーツから全教職員、全学生に届けられたのです。

午餐会は7月6日正午に神学館の一室で行われました。それは、非常に打ち解けた和気藹々とした集まりであったと伝えられています。学院史編纂室には、当日の英文献立表（スープ、スズキのホワイトソース、仔牛のパイ、チキンのフリカッセ、カレーライス、アイスクリーム、果物、コーヒー）が残されています。

転校を考えていたある学生は、これを機に心を変え、ベーツに手紙を送りました。「この温かみこそ他の如何なる学校に於ても到底味ふ事の出来ぬものである事を感じ遂に学院に留まる事に決定致しました」。この一件は「グッドディナー物語」として、後世まで語り継がれました。



関西学院高等学部教員—1912年—

C. J. L. ベーツ（前列右から2人目）は、W. K. マシューズ（ベーツの左後方）と共に高等学部開設計画を練ったと書いています。

【2010年8月】



10. "Launch out into the deep." (ルカ伝5章4節)

1932年、大学の設立認可を受けたC. J. L. ベーツ第4代院長(初代学長を兼任)は「関西学院大学のミッション」を発表しました。その要旨を紹介しましょう。

まず、関西学院は二つの意味でミッション・スクールであると指摘しました。一つは伝道局(ミッション)が創立した学校という意味、もう一つは使命(ミッション)を持った学校であるということです。ですから、関西学院大学は単なる学びの場ではなく、もっとも深い意味で"education"の源でなければならないと考えました。

ここで、"education"を「教育」と訳さなかったのは、ベーツがこの言葉をラテン語の語源から説明しているからです。ラテン語の"e(x)"は「～から」、"duco"は「導く」という意味です。したがって、学生が生まれながらに持っている才能を引き出すことが"education"なのです。これは、日本語の「教育」とは語源上の意味が異なります。では、それは何のためでしょうか。単に効率を追い求めるのではなく、学生が自分の考えを持ち、自身の言葉で語るができるようにするためです。学生の持つ素質の中から進取の精神と自信と自制心を育てるためです。

その上で、具体的にこう述べました。「我々のミッションは人間をつくることです。純粋な心の人間、芯の強い人間、鋭い洞察力を持つ人間、真理と義務に忠実な人間、嘘偽りのない誠意と揺るぎない信念を持った人間、寛大な人間です」。この中でベーツが最も強調したのは「寛大さ」(magnanimity)でした。これこそ、魂のもっとも崇高な姿だと考えたのです。

"Launch out into the deep." (沖に漕ぎ出そう)。関西学院が発展に向け新たな一歩を踏み出した時、ミッションを示したベーツは全構成員に呼びかけました。



C. J. L. ベーツ第4代院長・初代学長
(『関西学院大学商経学部第1回卒業記念アルバム』1937年より)

ベーツの力強く美しいハンドライティングは、
理事会記録、書簡、日記等に見ることができます。

【2010年10月】



11. 30 年来の旧友 - ベーツとマシューズ -

1908 年夏、軽井沢にいたカナダ・メソヂスト教会宣教師 C. J. L. ベーツは、アメリカの南メソヂスト監督教会宣教師 W. K. マシューズの訪問を受けました。マシューズが働く関西学院の経営にカナダのメソヂスト教会が加わる可能性についての話し合いに呼ばれたのです。ベーツが関西学院の話聞いたのはその時が初めてでした。しかし、当時のカナダ側は中学校再興を考えており、青山学院神学部と協力体制にありました。

ベーツとほぼ同時期の 1902 年に来日した 6 歳年長のマシューズは、山口で 2 年働いた後、関西学院に赴任し、1908 年春から図書館長を務めていました。関西学院にデュイ十進分類法を導入した図書館長として知られています。当時の日本でこの分類法を採用していたのは、山口市の公立図書館だけだったと、後年マシューズは書いています。

結局、カナダのメソヂスト教会は関西学院の経営に参加することになりました。今から百年前の 1910 年 9 月、ベーツ夫妻が 2 人の子どもを連れ、原田の森に赴任して来た時、休暇帰国中のマシューズに代わって T. H. ヘーデン夫妻が一家を温かく迎え入れました。

時は流れ、第 4 代院長を務めたベーツが関西学院を辞め、帰国する日がやって来ました。1940 年 12 月のことです。前年 3 月に行われた卒業式でのスピーチに端を発した院長辞任にまつわる一連の騒動は、ベーツの心を深く傷つけました。神戸港出航を翌日に控えた最後の夜、妻との食事を終えたベーツをマシューズ夫妻が訪ねました。ベーツにとってマシューズは「30 年来の大切な旧友」でした。2 人は、32 年前の夏の日を想い、暖炉の前でしみじみ語り合ったことでしょう。



C. J. L. ベーツと妻ハティに、長男レヴァー、長女ルル
(共に日本生まれ)。1910 年頃。
アルマン・デメストラルさん(ルルご子息)所蔵。

【2010 年 12 月】



12. アイゼンブルグ少年のレプタ

ブランチ・メモリアル・チャペル(現・神戸文学館)は、原田の森時代の関西学院を象徴する建物として知られています。チャペルには、建築資金の大部分を提供したヴァージニア州リッチモンドの銀行家ジョン・ブランチの名が付けられました。関西学院創立に当たり、大きな助けとなったのは、同氏の父トーマスの遺産でした。独立したチャペルが必要になった時、普通学部長 S. H. ウェンライトは、創立者 W. R. ランバスと共に息子のジョンを訪ね、協力を求めたのです。

チャペルの献堂式は1904年10月24日に行われました。建築資金について、ウェンライトはこう述べました。「日本を訪れたこともない、またこれからも訪れることのないアメリカの友人が、チャペルの完成に手を差し伸べてくれました」。その陰にはある少年の話が伝えられています。

チャペル建築のための寄付をウェンライトがミズーリ州モンティセ口の教会で求めた時のことでした。会衆から何の反応も得られない中、8～9歳の少年が立ち上がり、夕刊を売って得た小遣いから50セントを差し出しました。少年の名はヘンリー・アイゼンブルグ。ヘンリーにとって50セントは大金でした。この行動に感動した会衆から多額の献金が寄せられました。その後、ヘンリーは大学に進学し、銀行に就職しましたが、ミシシッピ川で汽船事故に遭い、命を落としました。他の乗客を助けた後、自らは老朽化した船と運命を共にしたと伝えられています。

1957年2月、ミズーリ州の大学に留学していた高等部教諭西尾康三がこの少年の父親を探しあてました。ニューロンドンに健在だった父親は、息子が関西学院のために小遣いを捧げた教会や通った小学校、そして、無残にも若い命を奪ったミシシッピ川を案内してくれたそうです。



J. C. C. ニュートン第3代院長の娘ルースが描いた
ブランチ・メモリアル・チャペル。水彩。
エモリー・アンダーウッドさん(ルースご令孫) 所蔵。

【2011年2月】



13. 父と娘

妻が病に倒れて以来、C. J. L. ベーツ第4代院長は、4人の子どもの中で唯一の娘であるルルを心の拠りどころとすることが多くなったようです。そんなベーツが、カナダで暮らす娘に好きな男性ができたのを知ったのは、1937年3月19日のことでした。恋の相手はエマニュエル・カレッジで学ぶ33歳のフランス系スイス人クロード・デメストラル。娘の気持ちを手紙で知ったベーツは、翌日の日記に複雑な胸中を記しています。「もし、クロード・デメストラルという吟遊詩人(きっとそんな格好をしているに違いない)のような名前の男がルルの愛を勝ち得たなら、彼はこの世で最高の宝を手に入れたことになる。彼はそれに値する立派な男でなければならない」。

その月の終わりには、娘の恋人から結婚の許しを求める手紙が届きました。それは大変立派な内容で、彼が申し分のない男性であることをベーツも認めざるを得ませんでした。

6月18日、トロントからの電報により、ベーツは2人が29日に挙式することを知りました。娘の花嫁姿を見ることも叶わず、父親としての感情を日記に吐露するしかありませんでした。「31年半前、赤ん坊だったルルを病院〔から〕抱いて帰って以来、こんなにも深く愛し、慈しんできた大切な娘が私たちのもとを去り、たった半年前に知り合ったばかりの男とともに行ってしまふ。しかも、その男の姓を名乗り、その男の家を守り、その男の家庭を築き、その男の子どもを抱くのだ」。

4年後、ルルは男の子を出産しました。ベーツにとって3人目の孫でした。アルマンと名付けられたこの孫が2001年に関西学院大学から名誉博士号を授与された時、長身の孫には祖父愛用のガウンがよく似合いました。



今田寛学長から名誉学位記を授与されるアルマン・デメストラルさん
—2001年12月20日—
今田学長の父患は、デメストラルさんの祖父C. J. L. ベーツの教え子でした。

【2011年6月】



14. 忘れられた墓標

「可愛い赤ちゃんの悲報を受け、今朝から胸のつぶれる思いです。…絶望の淵に沈んでおられることとお察しします。お二人の悲しみの深さは、私どもの想像の及ぶところではないでしょう。それでも、祈りの中で少しでもお力になりたいと、毎日、そして日に何度もあなたの方のために祈って参りました」。これは、1888年9月17日に書かれたW. R. ランバスからJ. C. C. ニュートン夫妻宛ての手紙です。ニュートンは、来日から4ヶ月も経たない内に、1年前に生まれたばかりの娘アニー・グレイスを亡くしたのです。

のちに関西学院初代神学部長、第3代院長を務めるニュートンが娘ルースとアニーを連れ、妻レティと共に横浜に到着したのは1888年5月21日のことでした。アメリカの南メソヂスト監督教会が経営に加わった東京のフィランデル・スミス一致神学校に派遣されたのです。2ヶ月後、神戸を訪れたニュートンは、留守を預かる妻にこう書きました。「ランバス父子ほど熱心な人を私は見たことがありません。彼らは昼も夜も休みなく働いています」。

アニーは東京の青山霊園に埋葬されました。35年後、ニュートン夫妻は日本での働きを終え、帰国します。1928年にレティが、31年にニュートンがアトランタで亡くなりました。ニュートンの愛児が日本に眠っていることを記憶する人もいなくなりました。

アニーの死から百年が経ちました。墓地を調べていた青山学院のジャン・クランメルが管理者不明の墓に気付き、関西学院に連絡してきました。関西学院は墓を修復しました。しかし、情報の確認が不十分だったようです。アニーの没年が1889年と墓石に刻まれてしまいました。



J. C. C. ニュートン第3代院長の次女

アニー・グレイス・ニュートン(1887-88)の肖像画。
エモリー・アンダーウッドさん(アニーの姉ルースご令孫)所蔵。

【2011年8月】



15. 天皇機関説事件と中島重教授

戦後、日本で接収された文部省思想局の秘密文書「各大学における憲法学説調査に関する文書」が米国議会図書館に保管されていたとの記事が、2006年12月20日付け『神戸新聞』に掲載されました。この秘密文書は、1935年の「天皇機関説事件」をめぐり、19名の憲法学者を機関説支持の度合いに応じ3段階に分類したものです。最も危険視された「速急の処置が必要な者」8名の中に、同志社大の田畑忍、東大の宮沢俊義等と共に関西学院大中島重の名がありました。

この文書は国家権力による追求の厳しさを伝えています。「自分は機関説論者。学説に殉じるのは本懐だ」。4月上旬、検事の問い合わせにそう答えた中島は、一月後、言葉を変えました。「改説ではないが、自省して機関説を説かないことにした」。

そんな中島のことを後年、ある教え子はこう書いています。「『あんなヒトラーのナチズムはやがて歴史の審判の前に崩壊するであろう』とあの病身で瘦躯な教授のキッと構えた眼光を今でもありありと想い出す」。さらに、西宮警察の特高が中島の授業の受講生のノートを手に入れようと動きかけていたとの噂もあったそうです。

中島と関西学院に対する追及の手は緩みませんでした。10月12日、文部省に呼び出されたC. J. L. ベーツ院長兼学長は、翌日の日記にその模様を記しました。「中島教授および憲法の授業について、赤間〔信義〕氏と十分話し合った。〔天皇〕機関説を教えないだけではもはや不十分、憲法の教師は『主権の主体は天皇である』ことを教えねばならないと同氏は言う」。天皇機関説を排除する第2次国体明徴声明が発表されたのは、その3日後のことでした。



新任大学教授招待会—1934年2月10日、宝塚ホテル—
中列左から2人目が中島重教授。C. J. L. ベーツ院長は前列右から4人目。

【2011年10月】





*The Branch Memorial Chapel,
now being used as the Kobe City Museum of Literature,
is a symbol of the early days of Kwansai Gakuin
in Harada-no-mori.
(photo by Kurumi Takagi)*



*Cornelius John Lighthall Bates, 1877-1963,
the fourth president of Kwansai Gakuin, 1920-40.*

本冊子は、関西学院広報誌『K. G. TODAY』に掲載された「学院探訪」を
まとめたものです（2009年4月～2011年10月）。



English: <http://www.kwansei.ac.jp/gakuinshi/ESPRIT.htm>

Japanese: <http://www.kwansei.ac.jp/gakuinshi/ESPRITJ.htm>

March 12, 2012